

アトランタのクリスマス

入江 礼子

(ピーチツリーシティー)

我が家は、アメリカはジョージア州アトランタ近郊のピーチツリーシティーという人口一万七千人余りの小さな町に住んでいます。このピーチツリーシティーは、今から丁度三十年前、綿密な開発計画のもとに作られた比較的新しい町です。住人は、もともと南部出身の人に加えて、北部や西部から移り住んで来た人、それに私達のような日本人も小さな町の割には多く、四百人余りが住

んでいます。ですからアメリカの南部といっても、生粋の南部とは言いにくい側面もっています。どちらかというところ中産階級が多く、多くの南部の典型的な古い町のように、とびきりの大金持ちもいなければ、いわゆる貧困層にあたる人々もほとんどいません。教育に対しても熱心な人の比率が高く、質の高い公立学校を持っていることを住民は誇りにすらしています。

こんな背景を持った我が町のクリスマス風景を、これ



から御紹介しようと思います。

(サンクスギビングが終わったら……)

11月23、24日、こちらはサンクスギビングの休日となります。この休日があけると、町は文字通りクリスマスカラー一色(？いえ、赤、緑、白の三色かもしれませぬ)になります。市庁舎の前庭には、大きなクリスマスツリーが立てられ、夜は明かりがともり、否が応でもクリスマスが近いことを感じさせられます。大きなスーパーマーケットも、デパートも、小さな小売店も専門店も一斉にクリスマス色に模様替えとなります。(ただし、日本のデパートのように店内放送で、ジングル・ベルのようないわゆるクリスマスソングが流れることは、全くといってよいほどありません。)

(小学校でも家庭でも)

特に学校、それも幼稚園から小学校の三年生までが通っている小学校の内部の飾りつけは、それは見事なも

のです。先生、生徒は言うに及ばず、ボランティアの母親が「私のクラスこそ一番素敵！」とばかりクリスマス用のディスプレイ(飾りつけ)に凝りに凝ります。日本では、幼稚園などで、その種の飾りつけが行われることがあります。その規模の大きさ、皆が集中する様子は、日本の比ではありません。下の娘のクラスは、クラスの入りのドアがすでに大きなクリスマス用のリース(輪かざり)でかざられ、外側の壁には、大きなサンタクロースの絵(主に色画用紙で作ってあります。)これは主にボランティアで出た母親の仕事で、そのままりを飾るこまごまとしたものは、母親達の指導のもとに、子ども達がつくりまします。教室の中に入れば、クリスマス用の靴下あり、やはり色画用紙で作ったろうそくや兵隊さんなどが、目にとび込んできます。

これらのものは、アート(美術)の時間に主につくられ、次々と教室をうめていきます。そしてクリスマス休暇に入る直前、下の娘の所属していた一年生は、全部集まって、いわゆるクリスマス集会をやり、ミスター・サ

ンタとミセス・サンタの出でくるクリスマス劇をやりました。クライマックスはクラスでのプレゼントの交換でして、息子の所屬していた三年生は、そのデイスプレイの他に、母親達のボランテニアがついて、"ジンジャーブレッドハウス"という、丁度"ヘンゼルとグレーテル"のお話に出てくるような"お菓子の家"をそれぞれ

の子どもが作りました。卵白を泡立てパウダーシュガーとターターという凝固剤を入れ、それを家の形にしたジンジャーブレッドにぬりつけ(一種ののりの役目をします)です。まっ白なので、みるからに雪をかぶった家という風情となり、それに、子ども達が思い思いに持ちよったキャンディー、チョコレート、ガムなどをはりつけ、見ていて楽しいお菓子の家が出来あがりというわけです。(息子はこれが大そう気に入り、この夏、アリが出没するまで、我が家の暖炉のところ飾っていました)そして、極めつけは、三年生全体で、遠足をおかねて、スクールバスに乗って、アトランタバレエ団の"ナッツ・クラッカー"(くるみ割り人形)を観に行き

ます。ペーター・ベンの第九交響曲が日本の年末に欠かせないように、ここでは"ナッツ・クラッカー"を見に行くことが、いやがうえでもクリスマス気分を盛りあげてくれるのです。

(家庭でも……)

この子ども達のクリスマスの最大の楽しみは、宗教的なことよりも、むしろ日本と同じサンタクロースの来訪を待つことです。特に、サンタを信じている小さな子ども達にとって、この楽しみは、何ものにもかえられないものとなっています。12月に入ると、各々の家庭で大きなクリスマスツリーが飾られ(大てい150〜200cmくらいある)それが居間などの窓辺にかざられることが多いです。自分で作ったオーナメントを思い思いにかざるのは、日本とかわりありませんが、何しろ木が大きいので、"クリスマスが来るぞう!"という気分がいやが上にも高まります。各々のソックスが暖炉わきにつるさ

れ、子ども達は、クリスマス・イブだけは暖炉をたいて

くれるなど親に必死にたのみです。そうするとサンタクロースが入れないからです。教会に行っている家庭では、教会でもクリスマスを待つ行事が次々と進行していきます。

(ライトで照らし出される家々、そしてクリスマス)

12月も10日頃には、かなりの割合の家々が、家のアウトラインが浮き出るように豆電球をかざりつけます。日本のようにほとんど街燈のない町の夜はまっくらなのですが、年に一度のこの飾りつけは、まるで夢の国のような美しい風景となります。各デヴィジョン(地区)ごとにその美しさを競うのは、日本の七夕祭りの賞を決めるのと同じです。12月も20日頃になると、夜になると、そういう美しい飾りつけをみようという車がいっぱい出て、渋滞などついぞないこの町も、この時ばかりは美しいデヴィジョンの前では渋滞となります。この風習は、もとはといえばドイツの風習なのだそうです。移民の国アメリカでは、祖国の祝い方を守り続けている人もいれ

ば、色々ととり入れている人もいます。これはドイツの風習、これはメキシコ等数えあげればきりがありませんが、それらが混じりあい、すべてを楽しんでしまうとこゝろにこの国の真骨頂があるように思えます。こうして待ちに待ったクリスマス。その日は、日本の元旦のように静けさにつつまれ、家族と共に祝うようです。

約一か月にわたって、ありとあらゆる楽しみを集中させ、待つことの喜びをうたいあげるアメリカのこの小さな町のクリスマス。厳肅なその日を迎えたあとは、思い思いのクリスマス休暇を楽しむこととなります。

(アメリカ在住)